

日本安全保障戦略  
研究所研究員

藤井 賢二

の爆撃訓練の一環とするのが自然である。

53年6月に2度「独島不法上陸」した時、日本船舶は米国旗を掲げていた。54年8月に日本の巡視船は韓

国の銃撃に応戦したとある。このようなことは考えられない。事実なら米国が問題視するはずだがそれは確認できない。また当時巡視船は武装されておらず、「応戦」などなかったことは海上保安庁長官の国会答弁でもわかる。日本は平和的解決を求めた。



ふじい・けんじ 島根県竹島問題研究顧問。同県吉賀町出身。近著に「サンフランシスコ平和条約における竹島の取扱いについて」（『島嶼研究ジャーナル』10巻1号）がある。

『朝鮮日報』の「独島物語」

50、60年代、日韓両政府は領有根拠を記した文書を交換して論争した。「韓国は当時外交的・学術的能力の甚だしい格差にもかかわらず、善戦した」と「独島

事実の直視こそ必要

物語」は評価する。しかし、韓国外交資料館の記録には、韓国政府は韓国を代表する歴史学者と国際法学者に62年の日本の第4回目の主張への反論作成を3回依

頼したが、結局作成されなかつた。韓国は日本を論破できなかったのであって「善戦」を奪おうとしたが、韓国は守り抜いた。竹島問題の経緯をこのように描く「独島物語」は、韓国人が事実を直視することを妨げている。その最大の事実が、51

年9月調印のサンフランシスコ平和条約で竹島が日本領に残ったことである。平和条約を作った米国は50年ごろに竹島を日本領に残す方針を固め、51年の英

紙面に対するご意見をお寄せください。住所と氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、メールでお願いします。  
<アドレス> opinion@sanin-chuo.co.jp